
魔法少女マギステルたかね！

源十郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女マジステルたかね！

【Nコード】

N4791Z

【作者名】

源十郎

【あらすじ】

マジステル・マジになるべく、日夜無私の心で活動する高音。そんな高音の傍らには、赤い弓兵が……

Fate x ネギまモノのクロスオーバーです

* 某魔法少女モノとは関係ありません

夜。

現代でこそ、深淵の闇と呼ばぬ程明るい宙を見上げてはいるが、この果てを知らぬ暗き宙は昔から“裏”の者達のフィールドだった。それは『魔』を冠すモノ達のフィールド。『魔物』『魔法使い』『そういつた』『表』の者達とは違い、『在る筈が無いモノ』とされた『裏』の者達は、光の強い昼を避ける。

『魔』である以上、人とは違うのだ。相成れぬ者達の争いを繰り返すよりは始めから世界を分ければ良いのだ、昼に、夜にへと。

鬱蒼と茂る深緑も、この闇ではより恐怖を煽るだけだ。

その『魔』達の存在を肯定するかの様に、今この場である闘争が起きていた。

人と人、近代兵器を使った戦ではなく

人と異形、魔法と武術の争い。

「……もっつ！ こう数が多くては！」

複数の異形を相手取る人は、幾分か大人びた感じはあるが、まだ少女と呼ぶに相応しい。

闇夜に融けるかのような『影』を人型のように操り、自らも闇色の光弾を撃ち、異形の数を少しずつ減らして行く。

強くもない下弦の月光を受けて、清涼な川面のように宙に舞うのは金と見間違ふ美しく長い髪。黒を基調とした修道服に似た衣服は、闇に在って純白の襟がCalla-Lilyを想わせる程に清楚に揺れる。

意志の強さが見てとれる顔容、その瞳は異形達を一つ残らず捕らえんと眼前を見据える。

「お、お姉様。魔力が持ちませんーっ！」

背後では、幾分か幼い少女が悲痛な声で訴える。

「何を泣き言を言ってるのです、愛衣！」

愛衣と呼ばれた少女は、涙目になりながらも「はい！ お姉様！」と健気に応える。

お姉様、と呼ばれた少女もまた、愛衣の奮闘する姿に鼓舞され、自らに宿る“魔”を駆る。

予想以上に奮迅する少女達に、異形は攻めあぐねていた。疲れも見てとれる。

力の枯渇も見てとれる。

明らかな失速、精彩を欠く動き

異形から見れば、死に体と何ら変わらない。

だが

その瞳に宿す意志は、陰るところか猛っている。

もう、数刻も持つまい。制圧は目前だ。

それでも

異形、人々の「悪しき幻想」で綴られた「恐怖」は

その「ヒト」に、ある種の「恐怖」を抱いてしまっていた。

「笑えんなあ。ワシら“鬼”が為体、おぼこい嬢ちゃんらに、これかいな」

異形「鬼」の独白。笑えない、と言ってはいるが　その唇は盛大な弧を画く。

恐怖は、幻想に生きる魔の者達、その中でも鬼や悪魔にとっては身近なモノだ。その“感情”こそ糧なのだから。

そして、それは他者から得るモノであり　自らの裡より出るモノではない。

故に、この恐怖はどう処理すべきか知らず　この恐怖を抱かせる「ヒト」を溢れんばかりの情を以て対するのだ。

待ち焦がれた生涯の友のように、穿った友情を以てすり潰す。
貴い一粒の宝石のようなソレを、狂った愛情を以て呑み下す。
張り裂けんばかりの動悸を抑え、凶った欲情を以て抱き伏せる。

嗚呼、堪らなく愛おしい。

こつこつした手合いとは、そうそう出会えない。“英雄”など持て離される輩とは比べモノにならないほど小さいが、それでもこの身に“喜悦”^{きょつぷ}を抱かせた。

その少女達の光輝く瞳が、絶望を宿したとしたら

「あかん、猛つてもうて、抑え切れんわ」

今宵の月と同じ、その口が弧を画く

恍惚とした表情は、色欲に捕われた蛮族と何が違うでもなかった。

傍らにいる少女「愛衣」に「お姉様」と呼ばれた少女、「高音」は強い意志を持ち得てはいたが、それでも覆らない「事実」を冷静に捉えていた。

『このままでは、私はともかく愛衣が先に落ちてしまっ』

秀才と呼ばれる愛衣ではあっても、戦闘経験も、判断力や制御も

容姿に合った程度でしかない。

まだ、幼いのだ、彼女は。

高音自身とて、そう多くの実戦を繰り返したワケではないが、その自分よりさらに少ない愛衣には今の状況がそう長く保てないのが良く分かる。

瞬間的な魔法行使、最大運用は高音と大して変わらないだろう。

だが、戦闘は何も短期で終わる訳でもなく、決闘のようにルールが在る訳でもない。

何時終わるか分からなければ、ペース配分も分からない。なら、序盤で相手を知り、必要分のみを常に放出すれば良い。

だが、愛衣は序盤で広域殲滅を選び、それに漏れた者達にも力を

行使した。

戦略的には間違っていない、数が多ければ当然の選択だ。

……が、それはバックアップがあれば成立するのである。

確かに、高音と言う存在はあるが いや、その存在があるからこそ、無茶をしたのだろう。

『全く、この娘は』

高音に認めて貰いたく、高音を傷付けたく無く、早急に決着を付けたいが為に。

しよすがない、と小さく吐息すると、不思議と活力が湧く。張りすぎた緊張が、和らぐのが分かる。

かなり減らしたはずの敵が、また少し増えたのを見ても、絶望感は無かった。ただ、ちよつとだけ背中に冷たい汗を感じただけ。

『やってあげます！ この程度で、私達は倒れません！』

愛衣は前提を間違えたが、何も相手を下す必要は無い。自らの役目は何だ？

役目は、この「麻帆良学園都市」の警護だ。護る＝打倒する、ではない。

なら

「最後まで抑えてみせます！」

残り少ない魔力、それでも己の矜持を以て完遂する。

そこへヒトの声が聞こえた。

『意気込むのは勝手だが、その前に伏せろ』

抑揚の無い平淡な声、それが直接脳裡に響くように聞こえた。

何のことはない、驚くこともない。

この声は知っている。こちらの味方であり 良く知る「男」の声だ。

問題は、

「ちよ、愛衣！ 伏せなさい！」

焦ったような高音の声に、「えっ？」と可愛らしくきょとんとするが 生憎と余裕もない。

高音が知りうる限り、あの男は

そんな高音の様子をチャンスと見て、5 mばかり先にいた烏天狗らしき異形が飛び込む いや、“飛び込もうとしていた”

「『なっ!?!?』」

誰の声だったか、自分の声だったかも分からない驚きの声。それを皮切りに、蹂躪と制圧が始まる。

烏天狗に刺さった『何か』が、烏天狗もろとも『消滅』し、驚きの時間さえ与えまいと、瀑布のようなソレは月光を反射しながら掃討を開始する。

流星と見間違っソレは、正確に、獰猛に標的を撃ち貫く。

一矢で消えた者はある意味幸せだったろう。

二度三度と貫かれた者は困惑のまま答えを得ずに消え逝く。

それでも生き延びた者は ?

永かったような、短かったような……

魔弾の掃射から辛うじて生き延びた者達は、僅かに三命。

『あかん、こいつは、あかん』

正直、訳が分からない。

いや、事象事態は理解出来る。

矢で穿たれた

それだけ。

だが、肝心の弓兵が見当たらない。

鬼達は、そう何度も経験出来ない『身を隠す』という行動を採る事で生き延びた。存在自体が『恐怖』と同意な鬼達にとって、逃げるに均しいこの行為は本来有り得ない。身を潜ませ、それによって『恐怖』を増長させることはあっても、だ。

その点で言えば、姿の見えない弓兵は正にソレ。どこから来るのか判らない攻撃こそ、本来悪魔や鬼と言った幻想に生きる者達の業のハズだった。

しかし、身を隠してからそれなりに時間は経っているが……全く音沙汰が無い。

時間こそ、10秒程度だが、殊、軍場では渦中に於いて有り得ない時間。

一秒ですら死に到る。

姿が見えないとは言え、矢は直線。移動しない限り来る方向自体は同じだ。

ならこの10秒、移動の時間とすれば……それは致命的な時間喪失。

矢を幾重にも受けて傷だらけの身では、予測の付かない攻撃を避け、受け、払つてもどこまで持つか判らない。

だが、ここに来て膠着状況に耐えられない者が出て来てしまった。いや、あれはある意味英断だ。鬼に仲間意識はあまり無いが、それでも目的を同じくする者が他に居るなら

少なくとも、盾として、そして探知器として役に立つ。

相手が既知の存在ならば。

音がした。

闇い冥い音がした。

鋭く重い音がした。

業、とも、劫とも聞こえる音。

剛、とも、轟とも聞こえる音。

その熾烈な一撃が奏でる音に、『恐怖そのもの』であるハズの鬼が一体、断末魔と共に逝く。『還った』ではない、その幻想ごとく消され』た。

只の矢で朽ちる筈がない。過ぎ去った衝撃など既知のモノだ。

なら 今の違和感は何だ？

撃ち手の技量 ？

『否』

矢に宿る魔力　？

『否』

幻想に生体の急所は無い。技量だけでは消されることなく。力だけでは存在を否定出来ない。

なら

その幻想を上回る、より強い幻想。魂魄にすら干渉する、その存在意義。

『在る可きモノ』とその貴き人々の願いを宿し、内包したその神秘を以て応えるモノ

“アレ“はそういった“モノ“だ

悪を払うとされたモノ、龍を滅つすると謳われたモノ、神に仇為すと忌み嫌われたモノ、王と共に在り斬れぬモノは無いと伝えられしモノ

“アレ“はそういった“モノ“だ

伝承の彼方に置き去りにされ、信仰を失いながらも、朽ちること無くカタチを持った神秘がそこに在る。

同じ『幻想』に在り、その理に於ける天敵でありながら

『　ああ、“懐かしい“なあ……』

悠久の刻の中で、再び出会った旧友に均しかった。宴はこれからだ。

祝杯には血を。互いの杯に、互いの血を捧げよ。魂を賭けた死の遊戯。血肉を貪る鬼が“宴（生存競争）“を

姉と慕う年下の少女を抱き伏せると同時に、蹂躪戦が始まった。

『ッ！』

左腕で愛衣を抱き寄せ、右腕で自らの頭を庇うようにしながら、声にならない悲鳴を上げる。

どれくらい時間が経ったのか、知覚出来ない。鬼を、地を、風を刺る音も何時消えたのか解らない。

気が付けば音は止み、それでもまだ戦いは終わっているのか把握出来ない彼女は、慎重に辺りを見回す。

先程までの喧騒　いや狂騒が嘘の様に夜の静けさを取り戻している。

そこには何も無い。

自分達以外に動くモノも、在る筈のモノも。

その静けさ故に、ソレの破音は一際大きく、断末魔は胸の奥を掻き回す程に響く。

あの蹂躪から生き延びた鬼がいた

ひいつ、と短い悲鳴を上げ、愛衣は両耳と目を塞ぐ。抱き伏せられてから未だその瞳に闇以外を映していないのだ、逆にこれ程の“異音“はその闇を以て助長される。

ヒトリの鬼が其イノチを散らした

在る可き所へ還ることすら赦されず、霧散させられる。瀑布のような魔弾の雨とは違い、闇を裂く一矢が、神秘の輝きを以て魔を伏滅する。カタチを持った幻想、神秘。現代に生きる『魔法使い』と呼ばれる者より古く、だがより濃密な力の在り方。

雄叫びと共に残りの鬼達が、狂瀾の海を渡る船の如く、縦横にその身を揺らしながら宙を往く

奇跡とは、“英雄”^{ヒト}が貴き頂きに至るまでの軌跡。その軌跡に、常にヒトの傍らに在る“アーティファクト武具”。^{アーティファクト}。伝承に在る“宝具”と呼ばれる神秘の塊。

それが、あの光の正体。そして“彼”が持つ力的一端。

「アレで何が、『所詮、贋作であり 自らの力ではない借り物だ』ですか」

自嘲気味に笑いながら、彼はそういった。高音には分らないが、彼にとってはそういうことらしい。

確かに、先程撃ち出された武具等は彼の魔力総量から見たら下手をすれば越えている。いや、魔法使いの従者達にとつての『アーティファクト』なら、従者以上の魔力の武具でも可笑しくはない。だが 彼の“ソレ”は“アーティファクト”ではあるが、そもそも“魔具”と云う範疇に抑えていいモノか……

そのアーティファクトを数多く呼び寄せ、弓で射る異端の弓兵。魔法も使いはするが、良く解らないモノだらけでいて、高音達の良く知る『魔法使い』の初級魔法は全く使えない。

その対魔力は相当低く、空を飛ぶ事も出来ない。気を使う事も出来なければ、それに伴う剣戟を飛ばす事も出来ない。い。

動きは相当に速いが、瞬動術を用いた瞬間的なモノで言えば負ける。

こうして見ると、大した事はない強さを感じる。だから、余計に彼の持つ“力”は異質にして強大だった。

麻帆良に於いて、誰より彼を知っているだろう高音ですら把握出来ない程に武具を召喚し、惜し気も無くそれらを散らす。その武具は、神器と呼ばれても遜色無い程のモノすらある。

ああ、だからか

“借り物”なんだろう。

“武具が”ではなく、“武具を使う自分”が、だ。武具の力に頼

った戦い方だから。

『いいえ、それも違いますね』

否、彼はそれに『頼って』はいない。

頼っただけの戦い方では、その多くで劣る能力では勝てない。単純に、低い対魔力だけで見ても、他の魔法使い達が牽制に使った魔法すら致命傷に成り兼ねない。

高音にとって、彼は十分に尊敬に値する人物だ。魔法使いとしての資質にて劣性、本人曰く剣の才能すら無い。師に当たる人物や、彼に関わった者にすら『全てが二流』と言われ続けたそうだ。

それでも　その『二流』を究めたのだ。数多の武具を召喚するのと同じように、二流と呼ばれようが数多の技術にてその全てで二流に到れば　それはどんなに素晴らしい『力』か。

そして、それらを効率的に運用する戦術論。それが彼　衛宮士郎と名乗る高音の良く知る男の『本当の力』なのだ。

「貴方はバックアップだった筈です！

何故、手を出したのですかっ!？」

「いや、何。確かに君達の想いを尊重しようとは手はださなかったが……」

あれほど劣勢では、な」

高音、愛衣の元に士郎が来たのと同時に、高音が抗議しだす。

元々、彼女達の修行の一環として、今回の麻帆良学園都市防衛任務では手を出さない予定だった。

今回は特に、麻帆良全体を覆う防護結界が消失する『定期メンテナンス』の実行日だった。当然、多数の人員を用いた大々的な防衛任務だが　麻帆良学園都市の広大な敷地を防衛するとなると、人員不足はやむを得ない。

時限防衛ではあるが、定刻まで少人数での各拠点防衛はなかなかに厳しい。

この高音、愛衣、土郎の班はそんな厳しい防衛にあっても『修行を前提にしていたのだ。発案者は高音だ。』

土郎は、その広大な射程を使い、他の班のバックアップも兼ねて後方に。高音、愛衣は修行も兼ねて前方に、だ。

だが、目論みより遙かに多い敵の前に、劣勢は否めなかった。

「た、確かに“少々”追い込まれてはいましたが、これから……これからでしたのに！」

『追い込まれた』と言っている時点で、劣勢は否定出来なくはあったが、愛衣には『少々』とは思えない。だが、そんな劣勢にあっても『やる気』に水を差される感じに手助けをされれば 確かに『少々』抗議したくもあった。

「まあ、そう言うな。ほら、じきに防護結界も復元する」

土郎の発言から僅かに間を置き、麻帆良の定期メンテナンス終了と、それに伴う防護結界の復元が始まった。

これで任務が完了したともなれば、肩の荷が下りた、とばかりに脱力するのも仕方ないだろう。愛衣は緊張も解け、その場に座り込んでしまう。

それを見て、尚も抗議しようとした高音も吐息を一つ 上がった眉尻と怒気を下げ、愛衣の傍らに屈み込む。

「お疲れ様、愛衣。良く頑張ったわね」

礼賛を受け、照れた笑顔を向ける後輩に、高音も笑顔で返す。何かをやり遂げた後のこの一時は、どんな状況であつても嬉しいモノであり、喜びは辛い修練や職務に在って何物にも代えられない糧だ。なら、今回の任務はこの少女達にとって、正しく人生の糧になったに違いない。

それを見届ける大人は土郎。余計な手助けをってしまったが、定刻まで時間があつた為に、増援を危惧して現勢力の殲滅を選択した。

結果から言えば、メンテナンスは定刻より大分早く終了した為に、本当にただ水を差しただけになってしまい、少々申し訳なく思つて

いたりする。

だが、それでも

生来の性か、女性……否、『他人』であれ傷付くのを嫌う彼は、遅かれ早かれ手を出していた可能性は多いにある。高音や愛衣が、もしあの時自身を鼓舞せず弱音を吐こうモノなら迷い無く敵を討ち滅ぼしたに違いない。

ただ『主』の意にそぐわない行動をしたことは、やはり申し訳なくも思う。

少女達の笑顔を見ては、自分の行いも満更間違いでもないのだろうと、いつかの大切な“笑顔きおく”に近付けたのかも知れないと思い、自然体であろうと誰にも気付かれないうつめた身体を休める。

「……クツ」

「ちよつと！ なんですか、その嫌味な笑いは！」

『……』

前々から思ってたはいたが、やはり自分はいつしか『普通の』笑顔は作れなくなっていたようだ。

どうやら今回も、他人の気を削ぐような『とても効率的で挑発的な』顔をしているらしい。

「いや、何。そうしていると歳相応に可憐に見えるな。実に微笑ましい」

「『なつ！？』」

すると、自然に出て来たフォローの言葉も、『とても効率的で挑発的な』皮肉気な感じになったことだろう。

全く以て、私の『従者』は扱い難い。

ちよつと気を抜くと、ニヤニヤと人の悪い笑みを向け、口を開けば皮肉ばかり。

『寝てるのか、馬鹿にしているのか判断に付きかねます！』

「可憐に見える」だの「微笑ましい」だのと聞けば、それは嬉し

くもある。

だが、妙に皮肉な笑みで言われれば、それこそ皮肉ではないかと訝りもする。

ただでさえ、異性との交流が少ない女子校だ。こんな特異な男性との交流ばかりで、自分達は大丈夫なのだろうか？ などと益体も無い思考に引きずられつつある高音だった。

「さて、立てる？ 愛衣」

争いの後の暗い森林に何時までも居たいとは思わない。それに事の顛末を報告する義務がある以上、あまり此処に長居する訳にもいかない。今だ起き上がる気配の無い愛衣に、起立を促してはみるが

「お、お姉様……」

腰が抜けちゃって立ち上がれませんかー」

案の定、返ってきた言葉は涙目と相俟って情けない声色と、それ相応の情けないセリフだった。

困った娘だ、とも思うが、それもまたこの娘らしくもあり微笑ましい。

しょうがないな、と心の中で言葉にするも、決して疲れや惰性で言ってる訳ではないし、手を差し延べるのは義務感や稚児の扱いではない。

この愛らしい『妹』を持てたことへ感謝している。

しょうがない、のはこんな愛らしい妹を見て微笑ましく想う自身。手を差し延べるのは何の打算もない、自身の裡から出る衝動だ。

『本当に、“しょうがない”』

差し延べた手を取り、頼りなく立ち上がる愛衣。あまりに頼りないので肩を抱くように手を回すと「えへへ」とはにかむように笑う。

「ふむ……立つのが辛いのなら、私が運ぼう」

そんなセリフと共に、ひょい、と横抱きに抱えるのは土郎。

あまりに急な展開に思考がついて行かず、啞然と見送る高音はと

もかく、抱き抱えられた愛衣もキョトンとしている。

丸めた手を胸元に、赤子の様に縮こまる愛衣は、暫くして漸く自身の状況を理解して顔を真っ赤にしていた。

悲鳴を上げるべきなのか、助けを求めらるべきなのか、大人しくしているべきなのか……など混乱の極みにある思考で、「どれも何か違う気がする」と考えている間にも、無言で愛衣を運ぶ男は歩みを止めない。

「ちよっ、待ちなさい！」

良く分からない状況に、停止していた高音は置いて行かれたことを漸く覚り、慌てて追いつける。

こと此処に到り 未だ混沌原因の『横抱きに抱える』と云う行為に、何ら追及が無い事に気付くのは大分後の話し。

春の陽気が感じられる時間まで、だいぶ早い。日は昇っているが、まだ幾分か肌寒い時間帯。

それでも遠目に見ると隙間無く路上は人でごった返していた。

麻帆良学園都市名物とも言える朝の登校風景だ。

つい半刻程前の、柔らかい朝の日差しと閑静で澄んだ景色は、喧騒と数えるのも億劫になる人ばかりで様変わりしていた。

女子高等部の朝も、例に漏れずこの騒がしくも活気に満ちた風景を画いている。

そんな「いつも」に在って、例外とも言える事情も少なからず存在する訳で

「くっ！？ 私としたことが、なんとという失態ですかっ！」

その例外に、「遅刻寸前の高音」というなかなかお目にかかれない希少な姿がある。

昨夜の定期メンテナンスによる防衛任務で、多量の魔力と睡眠時間の減少、長時間の戦闘行為に於ける緊張とストレスは、過度の睡眠を要求し 結果、今の状況に到る。

呪いの言葉も三度吐ければ気も紛れようが、彼女はそういった言葉すら嫌う。生真面目な質なものもそうだが、何より自身の目標にそぐわない。

こんな時間に登校するなど、未だかつて無かった高音には、同じ時間 つまり遅刻間際だが に登校する学生より些か余裕がない。走りながら食事を採る、などの娯楽映像の定番とも言える行為は全く思い付かないし、走った場合の登校時間の推量などは考えたことすらない。

つまり

朝食は摂らず、あとどれくらいで到着するのか測りかねない高音は、妥協も知らず空腹の上、疲れた身体に鞭打ちの全力疾走状態だ

った。

規律に厳しく、遅刻も申事ながら、一般への魔法漏洩を危惧して、魔法による自己強化もしていない。

模範的な学徒ではあるが、融通の利かなさもある。ロウサイドの典型だ。

涙目に真剣な表情で走る様は、それだけで印象的ではあるがそれだけに「遅刻寸前の状況」と云うのは奇異さが際立つ。高音を知る者なら、空を見上げて天気を心配するくらいには。

これで「ちこくちこく」などと叫びながらなら、容姿も相俟って微笑ましいところだが 彼女にそれを期待するのも酷かもしれない。

遅刻寸前ともなれば、校門前に人の波が押し寄せるものと鬱すらと高音の視界にも校舎が見えて来ると、嫌が応にも群れた人に視線が向くモノだ。

そして そこに「この状況で」会いたくない人物を見付けてしまつては、刹那と言えど身体を硬直させてしまつても致し方ない。

半ば現実逃避、気の動転、反射的な行動で近くは腕の時計と遠く校舎の時計を見比べ 若干の落ち着きを以て速度を緩める。

まだ、多少の時間的余裕があつたらしい。

荒い息を落ち着かせ、額の汗をスカートのポケットから取り出したハンカチで拭う。遅刻の危機とはいえ、きちんと身嗜みを整える辺り、良い生活習慣が窺える。

瞳を閉じゆっくり深呼吸を一つ。幾らか早足とは言え、歩みに変えて、再び開けた視界を真正面に向けると

見知った校門と、「この状況で」会いたくない人物とを近くに捉えてしまう。

せつかく落ち着けた全てをどこかへかなぐり捨てたかのように、眉間には皺を、歩調は荒く、怒気でも含ませたかのような視線はその人物へ。

それでも高音は、やはり“ロウサイド優等生”だった。

「おはようございます……“衛宮先生”」

その人物の脇を通り抜ける間際、すれ違い様に挨拶をする。いく
ら相手が自分の従者とはいえ、“表”では教師と生徒。目上の相手
より先に挨拶するのは当然だし、名前を呼び捨てにするなど以つて
の外だ。……なのだが。

ツン、と撥ねるように視線とは逆向きに鼻先を向ける。別に嫌い
なワケでもないが やはり、“今は“会いたくはなかった。

「おはよう、“グッドマン”。

……ふむ。君ともあるう者が、些か余裕の無い時間帯の登校だな」

ピクッ

……“分かつてはいた“が、やはり“こう来た“か。

何か一言あるのも、ニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべるのも、全
部全部“分かつていた“。 が、それでもやはり、感情も、それ
に影響する身体も無意識に反応してしまう。

思わず止まってしまうのを、若干の後悔を以て自らに叱責したと
して 錆た雨戸の様に、ギギギと擬音でも付きそうな具合に顔を
向ける。ついでにその戸板を外して感情すら通してやる。曰く、
「私は不機嫌です」。

腕を組み、口の端を吊り上げたその頭に来る顔に、文句の一つで
も言わなければ気が治まらない。そんな気がする。

「……ッ！」

キーンコーンカーンコーン……

辺りの空気を肺に入れ、その何かと一緒に吐き捨てようと口を開
いたと同時だった。誰もが良く知る鐘の音により未遂に終わる。

「ほら、どうした。もはや一刻の猶予も無いぞ？」

尚も募る苛立だしさと一緒に言葉も飲み込む。確かに猶予は無い。

二度目の「ツン」を無意識にしながら、不機嫌さを両足への動力にして校舎へ向かう。

常に前へ。己の理想と矜持を以て前を向く高音。そこに生まれるのは「自信」。そんな高音だからこそ、こんなに余裕の無い表情は珍しい。

そんな珍しい姿は、周りから見れば何とも「美味しい」のだ。普段とは違った姿。そのギャップが他人の妄想に色を付ける。

此処は女子高。異性の交流が少ない咲き誇るのを今か今かと待つ、蕾達の花園だ

遅刻は辛うじて回避された、睡魔に屈する事なく午前中の授業も残り一つで乗り切る……が、空腹は限界を超え、疲労も手伝い眩暈すら覚える。

据わった眼にギラついた“何か”を載せ、時計を凝視すること早十数分。

目に見えない“何か”を周囲に撒き散らす高音に、声を掛ける事の出来ない男性教員は、決して臆病ではない。心霊現象と区別の付かない“何か”は、結局“説明出来ない（オカルト）”という得体の知れないモノに、生存本能が警笛を鳴らし続け　目を反らし「何も無かった」と全てを否定しただけだ。

だから教科書を盾に顔を伏せながらガタガタ震える生徒が居ても、窓辺で空を眺めて現実逃避する生徒が居ても、きつと彼の中では「何も無かった」のだろう。彼の今日の授業は「黒板に向かって、黒板の為に説明する」と云う授業なのだ。

生徒は黒板ヒトリ。なべて世はこともなし。

キーンコーンカーンコーン……

授業終了の鐘の音。脊髓反射的なタイミングで、起立と号令する学級委員長。良く訓練された軍隊のように一糸乱れぬ直立を見せた級友達。

今、この場この時だけは

鐘音が途絶えてから一分もしない廊下に高音がいる。

授業終了の号令と同時に教室を後にしていた。急いで昼食を確保せねば、と早足で学食へ向かう。

しかし、廊下は走れない。これは譲れないし、規律を乱すことは許されない。自己の為に他者に迷惑を掛けるなど以っての外。

朝食を抜かざるをえない時間とはいえ、弁当の用意も出来ず、このまま昼食まで抜く羽目になったら泣く。多分泣く。

もし

もしもだが、これで財布を忘れたりしたらどうだろう？

「……………ものすごく、嫌な予感が……………」
「……………」

私はずっと寄り道もしないし、学食も使わない。必要なモノは前夜に用意する、が、財布もその中身も昨日は確認していない。

……………ゴクッ……………

冷や汗が出て来た、口の中の感覚なんてもう良く分からない。分からないのに喉が鳴る。

思わず止まって、財布の所在を確かめる。

……………ない……………

無い。意識が前に行き過ぎて、財布の重みも何も全然知覚出来な

かった。

いや、そもそも無かったのだから「知覚出来る訳がない」のだが。
「フ、フフフ……」

辺りが曇天の空の様に冥く見える。少しでも明るいモノを見ようと、廊下の窓に身体を向けるも、サッシに手を掛けたまま……落胆は顔を上げさせない。

『あー、可笑しい。なんでしょうか、これ。ここまで来れば、新しいコントか何か……あ、いえ、新しいくはありませんわね』
こと、ここに到っても気が付かないほど、高音は落ち込んでいた。冥い曇天こそ高音自身だと。

落ちた胆力などで、自身を御せるワケもない。ずるずる、と身を崩し、膝を屈してしまうのも致し方ない。

授業の圧迫から解放された生徒たちとは真逆の“何か”がそこに在る。

……在りはする、が。

誰ひとりそこへ近付こうとしないのも、また 頷ける話しても在った。

水と油は混ざらないのだから。真逆の存在が在ったとすれば、そこに干渉出来るのもまた、似たような存在か全くの別物だけ。

「何をやってるんだ、“グッドマン”」
ぴくつ、と肩を撥ねさせ、その男声に反応する。

些か過剰な反応だ、と自身でも感じていたが、ある意味それも当然かもしれない。

男声こそ衛宮士郎と名乗る、高音の従者にして女子高等部の教諭だった。

廊下に並んで窓際に立つ男女。

右に 腕を組んで、何とも嫌らしい笑みの長身男性が衛宮教諭。

左に 手を前に降ろし、指を絡めながら俯く女性は言わずもが

な、高音だ。

「ふむ。つまり、寝坊して朝食を抜き、昼食のみならず金銭すら持参するのを忘れた、と」

あれから現状を「かなり厚くオブラートに包んで」説明した。

幾度も一日に失敗もすれば、身を保つ自尊心も摩耗し、「牽制まですて」かなり厚くオブラートに包んで知人に話しを聞いてもらうのも吝かではなかった。

無論、最低限の自尊心から「決して愛衣や他の方々には言わないように！」と釘もさしておく。まだ完全に摩耗していない。絶対に。

……だというのに、この男。

あまりに身も蓋も無い言い様はなんだろうか。落胆とは別ベクトルのムカムカした『前衛的な』感情の赴くままに、キツと睨み付けてやる。『前衛的な』のは、怒っていて、哀しんでいて、恥ずかむ感情の総乱れの表情なのだろう。眉がつきそうなくらい中に寄っていて、涙目且つ羞恥に顔を真っ赤にすれば、きっとそうなのだろう。少なくとも土郎には　いや、何故か思い当たる節があった。本当に何故か。

終始嫌味な笑みを絶やさなかった土郎だが、ここに到り、組んでいた腕を崩し、目を瞑って眉間に寄った皺を揉む。

一度、二度。

三度目にもなると、高音の方でもその様子の変わり様に、幾分気が安らぐ。

四度。揉みほぐすのをピタリと止め、左目だけを開き高音を見詰める。

「あー……、流石に朝も昼も　では健康にも悪いし、精神面でも悪影響を及ぼすしな」

彼は昔からそうだった。こういった女性の顔には弱いし、いつも怒らせてばかり。興に乗ってからかい過ぎた。いや、ヒトをからかっているとも　昔から、怒らせてばかりだった。

ふむ。ともう一度頷きを入れ、再び高音を見る。

見上げてくる顔は、険も取れて呆気つとしている。目尻の玉の涙と、涙痕残る頬に注す朱が、より幼さと愛らしさを強調する。

思考が追い付いてない。そんな顔だ。が、これはとても「破壊力」がある。……少なくとも、当人達以外の野次馬には。

「ついて来い。何時までここに居ては埒が明かん、移動するぞ」
ぼふ、と音でもしそうな柔らかい髪に、帽子越しに手を置きながら言う。

その二人の様子に、幾人かの興奮気味な視線が集まっているが、余裕の無い高音も、あまりに自然にソレが出来てしまう土郎には全く気付かれていなかった。

二人が去った後も、話題はこれに尽きた。

野次馬達も、その場にいなかった者達も、舌で転がすように語り明かす。

女子ばかりで、男性が少ない日常でこんなに「美味しい」モノもない。

今は昼休み。

食後の甘味も良いが、もっと甘く新鮮な「ネタ」なら

膨れる妄想も、続く尾緒も、留まることを知らないらしい。

勝手に先へ行く衛宮教諭の後を追いついて行く最中、ふと思う。飯に学食へ向かったとして、食券もなにも買えない。理由も彼なら分かるはず。

なんのことはない。金銭の貸し借りは風紀的に「大問題」だからだ。

当然、教員たる彼も貸さないだろうし、高音も借りるつもりもない。

それを危惧したが、途中で道を変える。いや、学食が高音の頭にあっただけで、彼自身はこちらが正解なのだろう。

すると 自然、その行き先への推測へと思考がシフトする。今居る所は実習科棟。

そのまま半ば答えに到りながらズルズルと先延ばしについていくと

「家政科教員室？」

広大な敷地を、ほぼ教育機関に割り当てた麻帆良の校舎は、実習室・準備室の他に学科毎の教員室が設けられている。

ここは当然、「家政科教員室」なのだから、家政科の教員の為の部屋になる。

そう、つまり

この「衛宮教諭」は家政科の教員だった。

失礼します、とお決まりの語句と共に入室すると、少し驚きの顔をされたがにこやかに「どうぞ」と返される。

正直に言えば、ここへは来たことが無い。

そして、その教員達も全て知った顔でもない。

まあ、分かつてはいたことだが 女性ばかりだった。寧ろ、女性しかないない。

ただでさえ、女子校に男性教諭となると極端に少なくなる。居たとして年輩や既婚者だろう。若い独身男性は稀だ。

ましてやそれが“家政科”ともなれば、当然かもしれない。

「女性は家庭を守る者」と言いたい訳ではないが、今も昔もこういった場所へ男性が踏み込むのは稀だった。

さぞ、男性一人 と云うのは肩身が狭かるう、と。

「グッドマン。君はそちら
そう、その右端の空いている席に座りたまえ。そこが私の席だ」
言われた通りに座る。

その机の上に、男性らしい大きめの弁当箱が置いてあった。

『そういえば、久しぶりですね』

割と長い付き合いの割に、この麻帆良に来てからは彼の料理を口
にしていない。

純粹に、ちよつとたげ……本当に“ちよつとたげ”

嬉しさもあった。

そんな感傷に浸っていたのだ。だから、懐かしさに触れる問いが
来たら思わず「はい」と言ってしまうのも仕方ない。

その返事に滅多に見せない子供っぽい笑顔で返されてから そ
の問いを言葉で理解したのは遅すぎた。

高音、紅茶で良かったか？

彼と食事を共にしていた頃のこと。

私が彼の煎れた紅茶を初めて飲んでから、ひそかな楽しみにして
いた。

それから、その問いに、決まって嬉しさを表情に出して「はい」
と答えていたから。

……きつと、さつきもそんな感じだったのだろう。だって、

彼の表情も、昔を思い起こさせるから

家政科の教員は、6名居る。

内、男性1名。他は女性だ。

実は、ここだけの話し、男性教諭の「衛宮士郎」に興味津々な女性教諭はかなり多い。

まあ、興味があるのと、付き合うのは話しが別だし、今はそれは関係ない。

女性だらけの職場で、最初はもしかしたら肩身狭しとオロオロするのでは？

と、当初は思われていたのだ。

だが、いざ蓋を開けてみれば。彼は特に気負った様子もない。

女性の扱いに馴れたプレイボーイでもなく、既婚者か？ と云うとそうでもない。

そのわりに馴れていた。

寧ろ、「肝が据わった」というか、サラッと聞いた話しでは、

「周りに女性が居ることが多かった」

……とのこと。

ものすごく気になる発言ではあるが、表情がそれ以上に気になるくらい疲れていた為、深くは聞いていない。

家政科教員としての実力は、何故か無駄に高い。執事か何かと間違えそうなくらいには。

紅茶を煎れる腕前も素晴らしく、家政科教員室にはいつの間にか全員分の立派なティーセットがある。

彼が用意したモノではなく、個人のモノ。一人が自分用のモノを用意して、「紅茶を煎れてほしい」と頼むのを見てから。それ

からは割愛しよう。ある意味醜い。自尊心のぶつけ合いはあの時と、恋人が浮気した時だけで良い。

そんな彼が、一人の女生徒を教員室に連れて来た。

後で聞いた話したが、事情があり昼食どころか朝食も食べれなかったらしい。

本来なら「自業自得」と云うべきなのだが、彼が私情だけでこういったことをするとは思えないし、校則にも「生徒に自らが作ったモノを分け与えてはいけない」なんて無いのだから良いだろう。

調理実習で失敗した生徒の為に、余った食材を出したりするし、調理実習で作成したモノを他の生徒に渡したりもする。

うん。問題ない。

それに　それにだ。

余程お腹が空いていたのか、待ちきれなそうな、嬉しそうな表情をした女生徒はかわいらしい。

紅茶で良いか？　なんて問われた時の返事を聞いたら、正直ちょっと妬けたりもする。
するが

すごく良い表情だったし、その後の恥ずかしそうな顔は、そんな嫉妬心も帳消しにしてくれる。

私達　家政科女性教諭　にも紅茶を煎れてくれるらしいし、このくらいで目くじら立てたらポイントも下がろうものだ。

……何のポイントかは黙秘します。

さて、私達の紅茶も女生徒みたいに真っ赤にしてるし、暖かくて甘酸っぱい恋心は初々しいところが良いんです。

一番美味しい最後まで、ゆっくりじっくり味わいましょうか。

春の夕暮れ、紅く染まった空もいつも通り。

何が変わるわけでもないが、それは人には該当しないのだろう。

確かに今日と云う日、変わった何かがあった。

一時だけ、二人だけの過去返還。

ただ戻るだけか、そうでないか……

その答えなど誰も知らない。

知っているとすれば未来の誰か。

だが、何の変哲も無かったわけではない。一時だけとはいえ、「日常」では無かったのだから。

ただ、過去へ向いた二人とは違い、周りは劇的だったかもしれない

い。

それこそ「日常」の変革。変化の乏しい日常に、小石が投げられたその波紋。

何時だってそうだ。“小石（本人達）”より“波紋（周り）”の方が騒がしい。

沈んだ小石が、自身の起こした現象を確認するのは

さて、何時の話だろう。

聖ウルスラ女子高。

名前から察するに、西洋信教徒に関する学校なのだろう。

そこに通う者全てが敬謙な教徒ではないが 一部、信徒の鑑のような者もいるのは確かだ。

この学校に通う生徒の中に、高音・D・グッドマンと云う生徒が居る。

彼女が「信徒」かどうかは、この際関係はない。

ある問題があり、その問題の当事者ではあるが、それが「教義」に反しているかどうかの判断は彼女が付けたモノではないからだ。

となれば、当人以外が「問題」として提議したワケだが……

「男性教諭との恋愛なんて、言語道断です！」

「……はい？」

当人には理解出来ないこの事態。間の抜けた返事も当然だった。

ことの発端は、昨日の登校時や昼休みの出来事 「らしい」。

良く分からない展開に、幻痛を覚え、右の手の平で俯く顔をどうにか抑える。昨日とは打って変わって、いつもの余裕ある登校そして前例の無い追及。

これにどう反応すべきか、その追いついていかない思考と精神の答えはこれだ。つまり、「脱力」。

目の前には親交を深めた、とは言えない級友が居る。正直に言えば、友人としての会話など一度も無い間柄。「級友」と言う学校生活に於ける、勉学に励む同士となる。……無論、恋愛がどうかか色事を語る仲でもない。

尚も、道德観がどうかまくし立てる級友に、「ちょっと待ってください」と左手を眼前に突き出し制止する。

現実を直視することを無意識に拒む己の身体。それをどうにか制御して、級友の顔を見よう。

黒いワンピースの制服。オランダカイウの名前の元にもなった“尼僧服の襟”は、やはり尼僧服に似たこの制服にも名残りが取られる。

それはいい。自身の格好と何が違うでもない。

肩までの髪は黒く綺麗で、その持ち主の顔立ちは日本人らしい少し小さめの丸みある輪郭。垂れ気味の目

美人というより可愛い。愛衣もそうだが、ちょっと小柄な方が可愛いらしい。

ただ、その顔を真っ赤にした上で

眉間に皺を、眉尻は天へ。

つまり、「私、怒ってます」と。

そんな表情で問われては、可愛い顔も台なしだ。

あ、いや。それでも可愛いが。

助けを求めようと、全席中3分の1が疎らに埋まった教室を見渡す。

内、その半数は「興味はあるが関わりたくない」といった感じで残りはニヤニヤと成り行きを見守る　いや、訂正。見守ってない。アレは「楽しんで」いる。

再びありもしない痛みに、重い溜息が出る。

さて、この酷く身に覚えのない展開について、冷静に対処しよう。

そう、冷静に、冷静に……

先ず、昨日の登校時。

自身の状況は遅刻寸前。

『くっ！？この時点で頭のイタイ話しです……』

思い出すのもくじけそうになりながら、何とか持ち前の胆力で記憶を呼び起こす。

朝の挨拶。要らない皮肉を貰う。少々物申す事在りと口を開きかけ、予鈴に阻止される。尚もニヤニヤと嫌味な笑みと共に送り出される

駄目、思い出したら頭が……

更に追い討ちの幻痛を貰い、清々しい朝の空気など微塵に飛ぶ。

有り得ない。これのどこが「恋愛」などに繋がるのか……

だが、ここで「吞まれて」は、解決には程遠くなってしまつ。幸い、事情は次の「昼休み」の回想だけで終わる。落ち着け、冷静に、ちよつと胃も痛くなつて来ましたが我慢する。

昼休み。

自身の状況は昼食無し。ついでに金銭も。

『……………うう。何たる失態でしょう』

厄日ここに窮まる。人生でここまで思い出して落ち込む出来事があつたらうか？

……………あるかも知れないが、「色々」と我慢してまで思い出すことなどそうそう有り得ない。

今の私と同じように、酷く鬱な状況に、その身を崩す。……………寧ろ、今の方が酷い気がした。机に付きそうに垂れる頭を右手で支え、要らぬ腹痛を左手で抑える。

そんな私に声を掛けるのは、朝一番の皮肉をくれた男性。最悪の状況に、この相手。

『もう駄目。耐えられません』

ついに自らを支えるのを放棄し、万歳のように両手を天に。そのまま机に上半身を投げ出す。

流石にその死体じみた高音の様子に、「恋愛」という要素は皆無と判断。困惑しながら“死体^{たかね}”を突く相対した女生徒。

噂はあくまで噂なのか？ そう結論に到りそうな感じた。周りの生徒も、お手上げとばかりに首を振る。

暫く死体を演じていた高音が、ゆらゆら不安定に揺れながら起き上がる。

「ええと、私にはどうやって衛宮先生と……その、恋仲になつて、と噂になつたかわかりません」

どんよりとした空気を撒き散らし、据わつた目をしたまま問い掛けてきた。

何か自分達と彼女に、決定的な差異が存在するのはわかつた。少なくとも、彼女は衛宮先生を意識していない。

なら衛宮先生の一方的なもの？

そこで少し考えてみた。

普段の衛宮先生。

生徒にも自身にも厳しい。が、何か困つた事があると率先して助けてくれる。

学校に限つた話しでもなく、困つてる人の手助けをしている。学校の備品の修理もするし、良く気が付く。

普段はムスッと近寄り難い表情をしているが、優しい人柄で誠実な人間性だ。

父親か兄か、そんな感じ。実際「ウチの兄貴と交換してくれ」などと言う級友が居る。兄にほしいと思つている生徒は非常に多い。

……私も思う。

容姿は、日本人とは思えない浅黒い肌と白髪。顔立ちは日本人だから他の血筋も混じっているのだろう。

スーツからも分かるが、しりしりした体つき。その割に家庭的なアンバランスさ。

アンバランスだが、その頼り甲斐のある姿が「兄」なのだろう。では、高音の視点ではどうか？

「高音さんは、衛宮先生をどう思います？」
キョトンとする高音。暫く考え込んで、ゆっくり口を開く。

「……非常に皮肉と嫌味な笑みの多い、純真さを何処かに忘れたリアリストですね」

あまり良い感情の見えない表情と、吐き捨てるようなセリフに、今度はこちらがキョトンとしてしまう。

言っていることは解る。確かにその通りだろう。

でも、

「衛宮先生、優しいですよ？」

そんな毛嫌いするような言い方じゃなくても……

人助けとか、色んな技能を役立てる姿勢とか、物凄く尊敬出来るし……

それに、リアリストかも知れませんが、それだって人生経験豊富だから」

ガタンッ

言葉を遮るように、勢いよく席を立つ高音。

何が気に入らないのか、その表情は嫌悪。静まり返る教室で、驚き以外の唯一の顔だった。

「……ごめんなさい。」

確かに、私も尊敬出来ると思います。

いえ、正直尊敬してます。

でも、彼は“諦めてしまっ”てる。

あれだけの“能力”を持っているのに、“諦めてしまっ”てるんです」

……わからない。何に、何が、何を“諦めてしまっ”たのだろうか。わかることは 私達の知らない「何か」を知っていること。そして、その「何か」が決定的に擦れ違っていること それを救せない。

物凄く悔しそうだった。きっと衛宮先生なら、その「何か」を達成出来る そう「信じている」だけに。

だから、裏切られた気分なのだろう。

その「何か」さえ、衛宮先生が諦めていなければ 二人はお似

合いなのかもしれない。

高音は他の誰より、輝いて見える時がある。

何かとてもとても大きな「目標」を持っていて、それに向かって真っ直ぐ進んでいるように見えるから。

それが顕著で、周りが見えないこともあったりする。それで稀に失敗したり、正直煩わしいと思うこともある。

でも 「羨ましい」。

カッコイイし、綺麗だと思う。

アイドルのように、偶像としてしているわけじゃない。見た目とかそんなじゃない。

そう、云うなら「在り方」。

だから、自分達と違うモノに見えてしまう。

存在感が違うから浮いてしまう。

価値観が違うから浮いてしまう。

何だか置いて行かれたような疎外感すらある。たった一人だけが先に行っているのに、他はこちらに居るのに感じる真逆の疎外感。

だから彼女は独りが多い。

少なくともこの学校では。

そんな彼女が、衛宮先生にだけは知らない顔を見せた。

『ああ、なんだ あながち間違っていないじゃないですか』

多分、衛宮先生は、その「目標」に一番近い所にいる。少なくとも高音にとって。

だからこそ、自分達と違う彼女は衛宮先生にだけは、こんなにも感情を顕にするのだ。

怒って、泣いて、恥ずかしくて。

そのどれも、少しばかり違う色に見える。ほら、そう……家族と

かに見せるような。

「他人」とかの区別を知らない「純真」。

「他人」とかの隔壁で隠さない「全て」。

特別であり、常に近いモノ。そんな存在に見せるような感じ。

『これは 騒ぎ立てるだけ、不粋ですよね？』

恋仲とか、そうじゃないとか。そんな簡単な話ではない、と結論。

だったらあーだこーだと周りが盛り上がっても意味はない。

『なんとも、もどかしいですね』

気が付けば、自身の心境に変化があった。こともあるうちに「応援したい」などと。

彼女達は恋仲云々を抜きに、非常に良好な関係を築けるはずだ。

目標に互いに向かうパートナーでも、認め合いながら競い合うライバルでも良い。友人としても良いし、師弟のような間柄でも良い。とにかく、そういった「健全」で親密な間柄になることに対してなら、応援する気持ちも吝かではない。

一方で、二人が親密な間柄になるのは、やはり問題でもあるな、とも思う。この場合、「周りからの評価」が問題になる。少なくとも相対する自身は、今現状で「その様子はない」と理解出来るものの、現状を作り上げた噂話とは、端的に言えば他人の評価だ。曰く、「火の無い所に煙りは立たない」。

焚火か火事かは見る人で違う。高音の様子を「ただムキになっただけ」とする人が居れば、ただややこしくなるだけ。伝えれた「黒い煙り」と云う小さな情報だけで「大火事だ」と言う人も居るかもしれない。

『なんとも……もどかしいですね』

直接相対して初めて彼女が身近なヒトに見えた。逆に言えばやはり彼女はヒトと違う印象が強すぎる。

意図して目立とうとしなくても、どうしても目立つ。でも、それはあくまで表面的なモノ。華やかさで内面が隠れてしまう。

こうして思い悩み、時には泣いたり怒ったり　　恥ずかしさに
頬を染めることもあるだろうに。

だが、「普段」と括られたその見える部分だけを判断材料とした
結果　今は自身も後悔している　この「事件」に繋がった。

「……私には、高音さんが衛宮先生に対して何を怒っているのか
わかりません。

わかりませんが　それは、高音さんにとって『大切なこと』
ですか？」

私一人が彼女を理解したとて、物事の解決にはならないかもしれ
ない。

だが、それでも　級友を手助けしてはいけない理由なんて無
い。

だから知ろうと思う。

彼女はこんなにも鮮烈にして　　繊細なのだから。

「ええ。とても」

短く答えられた言葉に、ただ短く「そうですか」と返す。理解し
たつもりになってはいけない。でも、少しでも理解しようと努力す
るのは間違いではない。

それはきつと

自信に満ちたその笑顔のように。自分も「何か」を目指し、
咲き誇れる日が来るかもしれないのだから。

朝の教室での問答は、「何の根も葉も無い噂でした」と相手が折
れることでことなきを得る。

不思議と、親しくない自分に「機会があれば、もつと普通にお話
しましょう」と言ってくれたのが新鮮だった。

実の所、魔法関係者以外の人とは目標が目標だけに、イマイチ話
しが合わない。魔法の秘匿は当然。故に一般人にそんな話しは出来

ない。恋愛話やTVの番組について語るくらいなら自身を高める為の修練に勤しむべきだと思っている。

マギステル・マギ

魔法を使う者達にとって、この言葉は深い意味を持つ。

「偉大な魔法使い」を意味し、それは我欲を捨て、他者の為にその力を使う者。その在り方に憧れて、それを目指している。

他者の為に力を　つまり、それだけに「力」が必要だ。

自身を鍛えねば、他者に回す力など無くなる。常に高みを目指し、頂きに向かい駆け登る。

それが幼少から鍛え上げた己の矜持であり　その為に切り捨てたモノもある。

自分にはたわいもない話しをする相手がない。

別段それが寂しいわけではないが　それに憧れに似たモノを感じる。

しかし、やはり自身が目指す頂きへの過程に於いては必要の無いモノ。「他者の為」と云う概念は、その基準の曖昧さから自身への妥協が許されない。いざその力が必要な時、「基準がわからなくて鍛えていない」など笑い話にもならない。

故に、その「戯れ」を切り捨てたのだ。

それでも、必要性が無い“戯れ(コミュニケーション)”に、無意識の何処かで憧れを感じている。

いや、無意識の何処かに追いやっていたのだ。意識に昇らないように、自身を律する為に、目標の為に必要な犠牲の一つとして。余分に溺れて自身を見失ってしまう気がして……

それを思い出した。だから、返答に窮する。自己に施した戒めは、その役目を十二分に果たした。

……果たしてしまった。

そんな私を見て、彼女は気分を害した風も無く、綺麗な微笑みで

「今すぐでなくても良いのです」と言ってくれた。
嬉しくあり 言いようの知れぬ自身への怒りを感じる。

「他者の為」と謳いながら、その実他者を蔑ろにしている自分に
気付く。

魔法と云う力でしか救えない現実があり、魔法でなくても救える
事もある。

その境を明確に別けてしまえば、魔法を使える高音は前者だけを
見れば良い。 ヒトの心を度外視すれば。

気付いたことは“ソレ”。他者の為と思っていた事が、結果見え
ない所で他者を傷付けているのでは？ という疑問。

確かに、自身には余計かもしれないが 他人には必要なのかも
しれない。

「余計」「無駄」そういった高音の目標たる「偉大な魔法使い」
の道程に、不必要とされていたモノを求めるヒトがいる。その求め
に応えを窮した時点で、高音は「救済」を放棄したも同然だった。
淡い憧憬の念は、強い理想に追いやられる。しかし、どちらも自
らの裡から生まれたモノ。消える事なく裡に燻っていたソレは、こ
こに来てより強い疑問を投げ掛ける。

貴女はその切り捨ててきたモノも必要だった

理想とするモノが「魔法」を冠する為に、選択肢は無いと思っ
ていた。その結果失う“何か”を知らなかった故に。

それは、果たして「偉大な」者と呼べるのか

力なくては「理想」を追えない。

力だけでは「理想」に届かない。

そう……不必要なモノなど始めから無かったのかも知れない。

「まあ、それでも『恋愛』にかまけているヒマはありません

が

今回の事の根底にある「問題」は、今の高音には要らないモノ。
恋を知らぬ高音には、所詮裡から出た「自身の為の」気持ちと云
う認識だ。それこそ「我欲」。マギステル・マギには不要。やはり、
余分はあるのだと。

そう、まだ高音は知らない。

「ヒトを好きでいる」と云う気持ちこそ、「他者の為に」と力を
奮うその在り方の源泉なのだと云うことを。

そして、それが

彼女の淡い憧憬の根源だと謂うことを

4月の朝日は和らぐ……とはイメージだけなのか、カーテン越しの光りに寝呆気ながら右腕で壁を作る少女がいる。

日が昇るにつれ上がる気温と、身体を覆っていた布団の中の暖かさが相乗効果を齎したのだらう。就寝中の無意識さで跳ね退けたのか、布団が幾分乱れ寝具としての役目を熟せずにした。

シンプルな桜色の寝間着も、その無防備さ故に 乱れに乱れている。具体的に云うなら、腹部が胸元まで捲れて臍が見えるくらいには。

日の光りから逃げるように寝返りを一度。背中と膝と、ついでに手の甲も丸め、赤子のように縮こまる。

無意識の動きを夜半から繰り返したのか、腰から太股にかけて寝間着が捻れている。……更に言えば、そのせいで若干白い布地が見えていた。

あどけない寝顔は朝日から逃げれた今、幸福を体言したように眉尻も下がり、可愛いらしく半開きになっている口は穏やかな呼吸を繰り返す。呼吸に合わせ、輪を描いた唇からスースーと寝息が聞こえる。

金色の髪も寝具同様乱れていたが、その輝きは変わらずにそこに在る。括れた腰から耳元までと一緒に、その長い髪も一部を除き朝日に照らされていた。

光りを帯びた髪は、それ自体が貴金属のように輝き、絹のような滑らかさと軟らかさをアピールしている。その髪に触れたいと云う衝動に駆られる人も居そうだが 少なくともこの場には少女しか居ない。

そうして明かな惰眠を貪ること数分。静かな寝床に、外界から異音が雑じる。

カチャカチャと。時にトントント。

次第にジューっと云う音に変わる。それと同時に鼻腔を擦る匂いに少女が反応を示す。

音と匂いに抵抗するように、穏やかだった表情が陰しさを帯びて行く。

激しい抵抗を思わせる表情を数秒。やがて諦めに似た決意と共に、ゆっくりとした動作で起き上がる。

上半身を起こし、欠伸を一つ。ついでに右手で瞼を擦りながら、左手と全身を使い大きな伸びを一つ。

「あ、ふう……ん」

激しい脱力感を感じさせる動きと、締まりの無い口許から出た意味の無い声を漏らし、傾いた身体のまま硬直。そのまま寝てしまったように動かない少女の口から呼吸音がする。

一つ。二つ。

三つを数えた辺りで再び瞼を擦り始め、四つ五つと続ければ。六つ七つで漸くモソモソと動き始める。

ベッドに寝ていたのだが、緩慢な動きで落下せずに危なげ無く床に足を付ける。

右、左と順番に足を降ろし、直立するとまた欠伸を一つ。とても覚醒していると言い難い動きで寝間着に手を掛ける。

年頃の女性が無警戒過ぎた。何せ彼女の寝室は寮の一室であり、仕切にカーテンを使っただけ。それでもここは「女子」の為の寮だった。通常なら何の問題も無い。

上、下と別れた寝間着を脱衣。下着姿になりながら、一画にある衣服棚に歩み寄る。この時までには気付くべきだったのだ、今日は「いつもと違う」と。

未だに覚醒を知らぬ少女は、染み付いた普段の行動をトレースし、シャワーを浴びる為の準備をしているだけだった。

半裸を惜し気も無く曝し、無防備にカーテンを開け、尚も騒がしく音を立て香ばしい匂いのする台所を過ぎようとして声を掛けられる。

「ん？ 高音か？ おはよう。

……ふむ。随分とだらし無い起床だな。

早く顔を洗ってきたまえ、間もなく朝食……も」

声はいつもの聞き慣れた男声。だが、何だ？ 言葉をとぎらせ硬直したかのような……

声のする方を見てみる。似合わないようで身体の一部然と着こなしたエプロン姿におかしなところは無い。無いが、その白髪を降ろした表情は口を閉じるのを忘れ、呆然とこちらを見ている。

それを訝し気に思い、自身の身体を見て

「い、いやあああああ ツー！」

盛大な悲鳴と共に、無意識に纏った「影」付きの渾身の右フツクが相手の顎に突き刺さる。

相手を殴り倒してから漸く現状を把握した少女「高音」は、殴り倒した相手「土郎」に直ぐさま謝罪する。

土郎としては被害者なのだろうが、「そのつもりが無くとも、女性の肌を見てしまったのだから、こちらにも非はある」と同じく謝罪する。勿論、目は閉じながら。

直ぐさま高音に身仕度を促し 十数分を置いて二人は食卓にて相対する。

黒いカッターシャツに黒いスラックス、そこにエプロン着用のままの土郎の表情は外見上いつも通りである。

水色のセーターに紺のジーンズ、普段着の高音は逆にやや俯き加減で気落ちしているのが分かる。

そんな高音だが「気に病むことはない、気に病むとしたらこのままでは冷めてしまう食材達にしたまえ」と言われてしまえば、頷いて思考を切り替えるしかない。確かに、列ぶ料理は香ばしく香り立ち、今か今かと時を待ち侘びているようだ。

これでは罪なく、ヒトの為に身を捧げた食材達に申し訳が立たない。なら、謝罪と感謝を込めて、この国の作法を取れば良い。

「いただきます」

一つ言葉を出し、一つ口に料理を運ぶ。

そうすれば、ほら。

嫌なことを忘れて幸福に笑顔も禁じ得ない。後は落ち着いて箸を伸ばしながら、幸せの味を噛み締めれば良いのだから。

料理は「ヒトを幸せにする一番身近な魔法」と、目の前の男が言っていた。

美味しいと笑顔を見せ、それを見て 互いに幸せになれる「魔法」だと。

食卓に列ぶシンプルな和食。そのどれもに際立つモノは無いが、どれもがきめ細かい技術と気配りで出来ている。

派手さは要らない。少なくとも高音には。

あるのは彼女が親しみを持つ、この「土郎」が作る料理。疲れた身体をゆっくりと解すように、自身に良く馴染むその幸福感。技術だけなら、他にもこれ以上の料理を出すヒトが居るだろう。だが、高音個人の為に合わせた料理はどれだけのヒトが作れるのか

「作りたいから作った」「頼まれたから作った」と、そんなどこか退いた場所から出された料理には無いモノ。

「誰かの為に」と作られた料理にこそ 高音の心を満たせるモノなのだから。

「ごちそうさま」「お粗末さま」と作法ではあるが、互いに必要と感じて自然と口にする。

すっかりいつもの高音に戻ったのを確認して、食器を洗いに行く土郎。手伝いを申し出るが、やんわりと断られる。無理に手伝おうとしても、それを機に皮肉を浴びせられては堪らない。引き際は心得ている。

せつかくなので、空いた時間で部屋を片付ける。

そう、今日は日曜日。学業も無いなら身体を休めるも、普段手に付かない作業をするも自由なのだ。

そして、高音にとっては学業の無いこの日は目標の為に使える。

何より今日は、ルームメイトが土日の連休を利用して実家に帰っている。秘匿が前提の魔法を使った修練や、その勉強に勤しめる。

事実、ルームメイトが昨日の朝方から実家に帰っており、それから夜までを魔法の勉強に、夜からは実践演習に充てている。思えばそれが今朝の失態に繋がるのだが　とりあえず、そういった機会であることに違いはない。

昨日使った魔法教材を隠匿するように片付け、然も「何も無かった」と言わんばかりにする。

ルームメイトも、今日の夕刻には帰って来るだろう。それまでの時間、有意義に過ごさなくてはなるまい。何より明日からは数日間、忙しくなるのだから。

片付け終わりを見計らったように、仕切り越しに人の気配を感じる。あちらも洗い作業　とついでに台所の清掃も　を終わらせたのだろう。「準備は？」と主語も無く問われ、それに「ええ」と肯定の意を返す。何の事は無い。既に双方共に事前の了解があるのだから。

仕切りのカーテンを開き、互いの視線を絡ませると、士郎が折り置かれたエプロンを寄越す。高音も何の疑問も無く、それを受け取り

受け取ったのを確認した士郎が、前触れもなく“消えた”のだ。

魔法使いと呼ばれる者達にも共通した弱点がある。

「詠唱中は無防備であり、詠唱中断はそのまま魔法の失敗である」

と云うこと。

勿論、それを「ある程度」克服は出来るが、一定以上の大魔法は詠唱の長大さ故に確実性に欠ける。

ましてやインファイトはその展開の速さ故に、一瞬でも隙を見せれば文字通り「折り畳まれて」しまっただろう。

結論から言えば、そういった欠点を何も自ら克服する必要もない。勿論、ある程度は必要だが、完璧に熟さなくて良いのだ。

ミニステル・マギ

「魔法使いの従者」の意味を持つ、欠点を補い合うパートナー。ある契約を交わし、その潜在能力の具現たる「アーティファクト」を持つ存在。

これが魔法使い達の共通の知識であり、根底にある普遍“だった”。
例外は存在する、とは言え、そもそも較べる計りが違えばその普遍性はやはり揺るがないのだ。

つまり 魔法使いの常識とは全く次元の違う「従者」が居る。どういった理屈で呼び出され、どういった存在なのか理解不能。ましてや、その主はまだ高校生。その成長過程に何か悪影響が無いか心配するのは、大人のエゴだけではない。

主を「高音・D・グッドマン」、従者を「衛宮士郎」と言う。

そんな周りの評価も、当人達には意味がない。

事実として、従者は呼び出され、主は対価を与えている。対価は魔力。成長過程での魔力の搾取に、大人達は危機感を持っているが、契約そのものに理解が及ばない為に解説は出来ずにいる。

問題の従者も、存在そのものが魔力で構成されており、曰く「霊体」であるらしい。それを聞いた大人達は、当然「悪魔」などの“自身にとって理解出来る存在”に置き換え 結果、駆逐を前提と

した戦いが起きようとしたのは想像に難くない。

幾重にも魔法が飛び、その男に襲い掛かる。

男は逃げもせず、ただ花びらに似た盾を敷き、耐えつつける。所々欠け、男自身ポロポロになりながら、それでも鋼のような身体と視線、その心は不動。

やがて何かを悟り、一人　また一人と攻撃を止め、再びその男を見詰める。

満身創痍。もう立っているのも辛いだろくに、その身体を休めようともしない。何より壮絶なのは、その瞳に込められた意志。

それに折れたのは大人達だった。

年輩の魔法使いが問う、「何故そこから逃げない」と。男は答える、「逃げたら護れない」と。

年輩の魔法使いが問う、「何故反抗しない」と。男は答える、「同じ目的を持つ者同士が争ってどうする」と。

短いやり取りだが　それで悟る。

彼はただ、護りたいだけ。その背後に横たわる、まだ幼い少女を

これが、奇妙な主従の4年前的一幕。

曰く、この従者は「霊体」らしい。

女子寮への不法侵入モドキも、単に霊体へと身体を戻したが故。実体が無いのだから、侵入自体は楽だろう。

本来なら、彼のこの特性故に、そもそも「野放し」には出来ない。出来ないが、さすがは魔法を冠する者達の住まう地。対魔対霊処理はされている。でなければ、女子の貞操も危ないことこの上ない。本人がどうであれ、対外的にはそうだ。

故に、霊体化による透過は、対霊処理されていない場所や、また

る高音の傍や処置の一時凍結を高音が行った場合のみ可能。実体化すれば話しは別だが、物理的な重みの無い霊体では透過は無理。つまり、高音の部屋に居たのはそもそも高音自身によるモノだった。

普段は、ある意味冷遇とも言える「屋上からの対外監視」を命じられ、寒空の中放置される。

尤も、基本霊体故に睡眠も食事も必要無く、気温の変化も関係なければ風邪も引かない。

妥当ではあるし、当人は納得しているが 初めてそれを聞く者の涙を誘ったのも事実だった。……本当に泣いたのは高音の妹分たる愛衣だけだったが。

自室のドアを開け、霊体の従者が自身と同じ室外の廊下に出た事を確認すると、ドアノブに鍵を挿し回す。

確かな設錠音とその感触、そして自身の手でノブを回し引いてみる。完全な設錠を確認した時、廊下を走る足音が聞こえてきた。

「おはようございます！ お姉様！」

その声に振り返ると、案の定愛衣の姿があった。同じく「おはよう」と挨拶を交わし、揃って寮出入口へ向かって歩みを進める。

可愛いらしい花のような笑みと、その身を包むこれまた愛らしさを見せるチェックのワンピース。胸元の細いリボンと、肩のストールも似合っている。

そんな愛衣とは打って変わり、背後に感じる「空気」は重い。正に「空気」な士郎に、リンクを通した念話で問う。

『何を微妙に重い雰囲気にいるのです？』

その問い掛けに、ああ、と幾らか逡巡を見せ、やがて搾り出しように答えを返す。

『いや、なに 佐倉に朝の挨拶の一つも出来ない自身が不甲斐無くてね……』

ああ、と今度は高音が心の中で頷きを入れ、納得する。

彼は魔法に対する才能が極めて低く、念話すら満足に行かない。高音と士郎にだけ赦された特殊な念話により、霊体でも会話は可能だが、受け身たる受信以外に彼が霊体での念話送信が可能かと問われれば、残念ながら黙って首を横に振るのが人情だと言えるだろう。

ついでに言えば、士郎は何かとこの後輩を気にかけているような節がある。

高音個人としても、この愛らしい後輩を気にかけて貰えるのは有り難い。有り難いのだが、不思議と、「何故か」不思議と、業腹な時もある。

『……………では実体化して挨拶でもしたらいかがですか？』
なので少々気晴らしに弄ってみよう。

大概にこういう時は、彼の皮肉は出て来ない。答えに窮し、むう、と唸るだけ。これで溜飲も降ると謂うものだ。

「？ どうしました、お姉様？」
いけない、何かに気が付かれたかのような愛衣に、「なんでもない」と答え隠すように歩み続ける。

その背後に、未だに重い「空気」を引き連れながら。

いざ寮外へ。

目的地は、廃屋のある学園都市の端の森林地帯。

一般人があまり踏み入らない場所で、結界の敷き易さと土地の広さが目的に適している。その目的は魔法の実技演習に外ならない。秘匿を前提にする以上、行使する力を隠す結界を敷くのも修練の一環である。

愛衣と共に馴れた動作で式を編んでいると、いつの間にか実体化した士郎がいた。

「あ！ おはようございます、衛宮先生！」

それに気付いた愛衣が、にこやかに挨拶。つつい和んでしまいが、それが愛衣という少女の持ち味であり、高音も士郎も好ましいと思う在り方だ。

「ああ、おはよう、佐倉」

ぶつきらぼうで、短い挨拶だが　その実、韻は丁寧で優しく、一文字一文字にそれが込められている。

先程まで挨拶出来ずにいた為に、その分過剰に見える。

『……わざと実体化出来ないようにしたのは失敗だったかしら？』
実体化するのに人目を憚るなら、人目があるところを進むだけ。
嫌がらせのような囁かな意趣は　結果を見れば失敗だったらしい。

自身でも持て余す感情に、普段の嫌味を消した純粋な笑みを作る我が従者を睨む。それに気付いたのか、こちらを見て驚きの表情をする。それでも治まりを知らない高音と、驚きを困惑に変えて僅かにうるたえる士郎。更にそれを見て、くりくりとした綺麗な瞳に疑問を浮かべ、コクつと首を斜めに傾げる愛衣

長くは続かなかったが、混沌の“韻”^{おと}三つ。噛み合わない和音は、聞こえずとも鳴り響いていた。

「……で、やはり衣服の上では“影”を纏えないのかね？」

廃屋に入り、シートを敷き、そこで「着替え」て来た高音達に開口一番の士郎の言葉だ。残念ながらと答えを返し、理由も伝える。

やはり自身の肌と違い、その「境界」がイメージ出来ず、上手く“影”を纏えない。そう、「着替え」とは、戦闘用の防護服を、魔法による「操影」で編むこと。

対物理・対魔力を向上させるこの魔法。本来実体の無い「影」を纏う為、その重みや布擦れの煩わしさは無い。更に「影」と云う不定の存在は、その普遍的なカテゴリー「架空」と云うヒトの身近に

在りながら、決して手の届かない存在としての定義を持つ。

「架空」　つまり想像こそがその根底にある。自身の想像がそのまま力を持つものだから、魔力ある限り、自身の「イメージ」を崩さぬ限り　その力に際限は無い。

あらゆる意味で特殊な魔的な要素だが、その長所がそのまま欠点とも言えた。

端的に言えば、全ての根源は自身の裡に在る。外的要因も無い、自身との戦い。それに対する“彼”の言葉はこう　曰く、「勝てる自身を創造しろ」と。

「ふむ。少なくとも下着の上からでも影を纏えると、万が一の時でも安心出来るのだがね」

万が一とは、イメージの破綻による影の消失だった。目下、高音の優先事項はこれだ。

「気絶する度に『脱げ』ていては、私もおちおち目を開けて居られなくてね」

イチイチ皮肉を口にしなくてもわかつてはいる。いるが、正論故に反論も出来ない。高音とて、好き好んで肌を曝したいなどと思わない。

だが、この防御はかなり優秀で、基本故に最奥とも言える。基本故に、ここからの発展も非常に多い。「操影」による自立“影”人形の同時操作もそれに当たる。

守勢に長けた能力だが、一対多の戦闘ですら勝ちを拾える希少性をも内包する。自身の防御を最大に、と同時に影人形による自立攻撃。影の攻撃力が低くても、最終的に立っていれば勝ちだ。

現状、影人形の最大運用個体数は17。つまり、17もの壁を持つ。他者を守る為の能力としては有用だった。“影”と云う陰鬱なイメージがあるとはいえ、高音も愛衣も　そして士郎も、これを是としている。

高音としても、別に相手を滅ぼす力が欲しいわけではない。必要なのは守る為の力。それを一番有効に使え、自身の適性に合っていたのが“影”だったに過ぎない。
その高音の秘奥とも言えるモノがある。

黒衣の夜想曲

ノクトウルナ・ニグレートイニス

近接戦闘に於いて、その物理的な攻撃を“自立防御”する巨大影人形の創造。あらゆる攻撃から主を護り、その巨大による攻撃で圧倒する最終奥義。

攻守一体の操影術がそこにある。

今回の修業の半分はこれ、「黒衣の夜想曲」での戦闘訓練になるとなりに、近接と対を為す遠距離でのサポートをする愛衣がいる。

布陣は問題無い。だが、“敵”を侮るな。“敵”は

「さあ、行くぞ。制限時間は10分。

……その間、耐えてみせる」

“敵”は、“最強を創造する自分自身”なのだから！

夢。

今、私こと「高音」が見ている映像を言い表すならそれ。

有り得ざる光景を背の低い「誰か」の視点で、逃げることすら出来ずに見せられ続ける。

強いてこの夢を言い表すなら 「悪夢」。

具体的にどんな夢かと問われれば、辺り一面夕焼けよりも鮮烈な「朱」。

夢だからか、熱を感じないが、その「朱」は紛れも無い炎。これがかもし、現なら息をするのも苦しいだろう。現に、夢の中の「私」はフラフラで、視界はぼんやり、足取りも覚束ないのか奇妙に揺れている。

「私」はただ緩慢に動き続け、目を反らすことも、閉じることも赦されずに映る光景を黙って見続ける。

ふと、視界の片隅に崩れ落ちる黒い「何か」が目映る。これを見る度に、悲鳴を上げなくなるが 「私」はそれすら赦されないらしい。

黒い「何か」は、ヒトの型をしている。分かっている、分かっている。それはほんの少し前まで「私」と同じように歩み続けた「ヒト」なのだから。

理不尽に身を焼かれた「ヒト」は大人の女性で、良く見ればその腕には小さな「ヒト」も見て取れる。

そんな「何か」を、永遠と造り続ける「朱」に違う色がある。

黒く、丸い 日食を想わせる「太陽」。

いや、それは違う。本能は拒絶する。「アレ」は駄目だ、視線を反らせ、近付くな

「私」の願いを聞き入れた夢の中の「私」は、そこから遠ざかるように歩み始める。

すると、まだ息の在るヒトも居るのだろう。轟々と唸る炎の中からヒトの声が聞こえる。

だが、忘れるな。これは「悪夢」。救いなど無いのかのように無情を曝す。

声は一樣に一つの願いを口にする。

たすけて

只の一つ、それだけだ。

些細な願いは、その悪夢に在ってはいけないのか。助けを求める声は常に「私」に降り懸かる。「私」は助けたい気持ちを抱えながら、「私」自身も助かりたい一心である。「黒い太陽」から逃げ続ける。

ごめんなさい

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

流せぬ涙、発せぬ言葉。そうやって心の中で謝罪しながら 願いを踏みじめる。どうしようもないと分かってはいるが、それでも願いを叶えられない自身が酷く矮小な存在に思える。

縋る手を振り払い、ただ前に進む小さな「私」。

こんな小さな「私」が、力さえ残っているかわからない「私」が、そう長く身体を動かせるはずも無い。何れ力尽きて、大小様々なヒトの成れ果てとさして変わらない姿になるのは明白。

でも、ちがう

そう、「私」は知っている。夢の中の「私」を助ける奇跡を。こんな醜悪な世界に在って、一際美しく見える光景を

助け起こされた「私」を覗き込む、ボサボサの髪と髭の男性。ヨレヨレの外套は、火災の渦中であっては無事な所などなくなっている。

それでも　それは「美しい」。

その不思議な笑顔で、この悪夢は終わる。そして

それは、次の「夢」の始まりなのだから。

鈍い覚醒に従って、次々と自己のパーツを認識していく。

眼球の痺れに似た怠惰感から、喉の渴きと、額と目尻と頬の湿った感触。漸く認識した左腕を額に、右手で目尻と頬を拭う。渴いた喉に、無理矢理唾液を流し込み、ゴクリと鳴らす。ここまでの行程で、思考が上手く回り始め　現の自身を全て認識する。

「はあ……」

仰向けのまま溜息。ここは「夢」ではないと把握した。見馴れた天井と、カーテン越しの朝日は、けっして炎を纏っていない。

「久しぶりに、見ました」

誰も居ない天井に向かって、独りごちる。

数年前は上手く意識の制御が出来ず、あの夢を度々見ていた。うなされていたらしいし、たまに夢と現が区別付かずに半狂乱になっっていたらしい。

らしい、と云うのも、自身では良くわからないことだし、周りの評価の話し。

高音も漸くそれに馴れ、悪夢も久しく見ていない。ただ、夢だと判りつつも、その「出来事」を忘れられない。

自身の過去に、あんな地獄のような出来事は無い。ただ、規模の大小はあれど、世界のどこかでは当たり前のようにソレはある。もしかしたら、今この時でさえ起こっている可能性はあるのだ。

ただ、何故ソレを見ているかは不明。

他人に話すと、真面目に取り合う気が無い者は、「前世だ」などと言う。取り合う者は、「色々な暗示」だと言う。

色々とは？ 問い掛けの答えもそれぞれ、「結局は我が身可愛いさだ」とか「所詮どんなに頑張っても人を全て救えない」とか。最後の場面を指し「どんなに地獄に遭おうとも、救いはあるのだ」とも言う。

どれも正確のようで、どれも違う気がする。

ただ、一人だけ 問いに答えが無い。高音の従者たる「土郎」だけは。

尋ねた瞬間の驚きと、その後の深い思考だけを見せ付けて、肝心の答えをうやむやにした。

「夢」を見ない方法を啓示されて、それで喜んでしまった。その後になって、答えを聞いていない事に気付くとは 余程、高音には余裕が無かったのだろう。

それ以来、夢を見ずに過ごせた。時が経ち、夢の輪郭も薄らぐと、記憶の隅に追いやっていたらしい。

今更蒸し返すつもりも無かったが 何故に今になってまた夢を見たのか？

「……どうせ、答えなんて返ってきません」

天井に向かって眉間に皺寄せて、そこに居ない「誰か」を睨みつける。

薄々、高音にも感じられることが在ったが 敢えてそれを訪おうとは思わない。「そんなこと」とただ笑い流せばいい。少なくとも今は。

「そう……そうですね。『そんなこと』より」

気怠さの滲み出る動きで、ベッドから這い出す。乾いては来たが、未だにべとつく寝汗は早く洗い流したい。魔法使いとしての高音が、「学生」として紛れ込む儀式。「不可思議」を太陽の下に曝す訳にもいかない。答えの返らない「夢」の記憶なんて、それこそナンセンス。そんな形も無ければ、それを覗くことも叶わない「今」では、

ソレを理由に「表」に自己を置けないようであれば　理想には程遠い。

「無私の中で他者の為に」。それを謳うなら、自己を律せずにと
うする、と。

気持ちを入れ替えるかのように数回、起きがけ頭を左右に振る。
ついでに火照った両の頬を軽く平手で、逆手で、と熱を冷ますよう
に交互に挟んでみる。後は習慣かされた手順をトレース。先ずは、
やはり纏わり付く汗と一緒に　こびりついた嫌な気分も洗い流そ
う。

恒例の朝の通学ラッシュ

のはずなのだが、今日は幾分か人通りが少ない。理由は解り
きつている。女子中等部などが修学旅行で出払っている為だ。

だが、それでも全体数から見れば高が知れており、気持ち混雑が
緩和されたのを気付くくらい。修学旅行も高々一学年のみ、中等部
を例にとってもその全体数の三分の一。学園全体なら　さて、何
分の一になるのやら。

ともあれ、それは通学風景よりもより歴然とした影響を与える事
態がある。別に学業に影響がある訳でもないが　云うなれば「裏
側の事情」と言ったところか。

事、裏側とは言え年端も行かぬ学生達自身に非はない。どちらか
と云えば、学園の教員側に問題が生じる。

学生も人の子。勿論親が居て、それは教員では無い者が大多数。
つまるところ、その子達を預かる以上、保護も義務付けられてい
るのは必定。各学級担任と、その随伴教員も修学旅行に同伴するの
は当たり前である。

しかし、それすら「表」の事情ではあるが　問題となるのは、
その随伴教員の一部が「裏」での事情に關与している事実。この場
合の裏側とは魔法関係者であり、俗に「魔法先生」と呼ばれる者達

のことだ。

そもそも、学舎の大半は学生で、教員は存在数自体が少ない。学園全体での魔法関係者の総数は数パーセントであっても、反比例して教員数での魔法関係者は割合が増える。

要は、「学園での魔法関係者の残留数減少」が問題の根幹であった。

その残留魔法関係者の一人である衛宮教員。彼は今日も聖ウルスラ女子の校門に立っていた。

女子校に居るだけで男性は目立つが、彼の場合それ以前の問題とも言える。

何より日本人に見えない。初見で日本人だと思っ人は居ない。良くてクォーター。身長の高さは除外したとしても、肌と髪と瞳の色は日本人離れし過ぎる。そのどれもが後付けの乾いた着色感や、妙な艶もなく、初めからそうだったとしか言いよの無い色だった。

一つ見方を違えると、知らずに緊急ダイヤルに繋いでしまいそうな佇まいと、その目の鋭さ。身長の高さも相俟って、近寄り難い印象が強い。

強いのだが

「おはようございます。衛宮センサー」

のだが、生徒のウケは良い方で、笑顔の挨拶は陰りの一つも無い。

「ああ、おはよう。……む？ もしや、とは思っが 夜更かしはしてまいな？」

「あ、分かります？」

……ってか、何でわかるんです？」

朝の挨拶を返された生徒。続く指摘に不思議そうな目を向けて問う。

生徒自身は、少し眠くはあつたが別段振る舞いに平常との差異

は無いと思っていた。それ故の疑問。

「ふむ。いやなに、持ち辛そうにしている左の鞆から、だ。左肩に掛けながら、紐が弛む程に右手で持ち上げている。その癖、左手は鞆を小脇に抱えているのに動かそうとしない。

疲労が左　特に肩に掛かっているのだらうよ。勉強か何かは知らんが、長時間同じ姿勢だった。……違うか？」

返された答に、一瞬目を驚きに見開くと、照れ隠しに笑いながら「正解です」と口にする女生徒。

肉体的な疲労が、休息に対し回復が追い付かず、それでいて自制が効く程に仕事に難が無いなら　それは睡眠前に行われたと推測される。

勿論、その限りではないし、人間の行動範囲の広さや個性　出したらキリの無い選択肢がある。今回は正解だったし、衛宮教員自身もあくまで推論を語っただけだ。数ある可能性から、広く占めるパターンの割合と、少ない誤差範囲の解答を述べただけ。当人でもないのに、「作者の心境を書け」と問う国語の試験解答と大差は無い。

その推論の根底は、彼の観察力もあるが　経験測や知識から来る。

「あまり無茶はするなよ？　辛ければ私でも良いし、他の教員でもかまわん。頼れば良い。」

頼れと言われ、嬉しそうに「はい！」と朗らかな返事をする女生徒。尚も心配気に朝食を抜いてないかと問われるが、それには否定。それに満足気に頷くと、「しっかりな」と一声。

鼓舞された様に、しっかりした足取りと疲れを忘れたような大きな手振りを以て、校舎に駆ける生徒。

衛宮教員は目立つ。

容姿も申事ながら、細かい気配りが生徒に人気だからだ。

近寄り難い印象も、慣れ親しめば驚く程優しく頼り甲斐のある印象に替わる。

目下、彼の評価は以下の事から読み取れるだろう。

曰く、

「理想的な兄」

「執事にしたい男性ナンバーワン」

他にも幾つかあるが、大凡はこのようなモノであり、大多数は好意的なモノだ。若干、例外もあるが。

「ほら、君はリボンが曲がっているぞ。可愛らしく髪まで整えたのだ、こんなところで損はしたくないだろう？」

そちらの君。何故そこでリボンを崩す。何？ どうなっているかわからないから直して欲しい等と……

申し訳ないがね、女性の胸元に不必要に手を伸ばす不埒な行為は出来んよ。何故残念な顔をする……」

今日も今日とて、何かに気付いては一人一人に声を掛け、注意を促したりしている。

中には態と注意を貰いたがるような生徒も居るが、飽きもせず、嫌がることもせず真摯に対応する。それがまた泥沼に身を浸ける結果になるのだが 骨どころか魂に刻まれた“性質”^{さが}がそう簡単に改変されるとは思えない。

そうして日々変わらぬ彼の課は続く。

朝日すら追いつけない程の生の輝きを満たす女生徒達の笑顔を眺め、陰りあるものには励ましを。誰一人余す事なく挨拶を贈る。

そして、彼の日課には皮肉気な笑顔を贈る相手もいる。実際に多数、皮肉を言われる事もある。しかし何故か、彼女にだけは、「時折」ではなく「何時も」であった。

「さて、おはよう、だ。敢えて聞くが、何故そんなに不機嫌そうなのかね？ “グッドマン”」

そう、何時もそれは彼女に向いていた。

学業も終わり、遂ぞ何等変化の無い日常も半日過ぎる。

そのまま日常を謳歌出来る立場ではない、と高音は自己を律している。

今、高音を初め、学園に残った一定規準を上回っている能力保持者が広場に集まっていた。「一定規準」とは有り体に言えば戦闘能力であったり、「能力保持者」とはつまり魔法使いであったりつまりは「そういうこと」、だ。

そんな彼女達が集まっている以上、戦時でもないのにある種の緊張感が漂っていた。ここに居るのは全て味方だ、と断言出来るが、これより来訪する「モノ」はとても味方とは言えず、これも断言するが 戦闘行為は避けられまい。

一人、長い髭を蓄えた高齢の男が、指揮者のように堂々と壇上上がる。この場に居る者なら知らぬ者が居ない、ここ「麻帆良学園都市」の裏側 「関東魔法協会」のトップである老人だった。

どちらの「顔」でも、「学園長」「理事長」とトップであり、彼の一声が全てを決する と言っても何等間違いとも言えない。だからこそ、この場の緊張感も厭が応でも高まる。

「さて、集まってもらったのは他でもない。メンテナンスの日よりは断然難易度は低い じゃが、人員は明らかに減少しておる。本来なら、魔法生徒は休んで貰いたいが、そういうワケにもいかん。すまんが 学園の防衛任務、心して欲しい」

そのトップの言葉だ、誰も異論は無い。そもそも、魔法使いの在り方は「他者の為」にある。学園都市に住まう人々の為なら、彼等に異論なぞ無いし、「言われるまでも無い」。

だからこそ、彼等の返答は短くも力強く、想いと同じく声すら重

なるのだろつ。

一斉に返る声に、頷くと「では、頼む」と皆を送り出す「学園長」。

その彼の視線の先には、高音達「魔法生徒」の姿がある。

その瞳の色に、愁いが混じっているのを見た者は居なかった……

黒尽くめな人影が三つ、夜を駆ける。

高音・愛衣・土郎の三人だ。

「一つ、聞いてもいいですか？」

指定防衛拠点の付近に到達したとき、愛衣が土郎に向かって問う。

何かね？ と何時もの調子で応える土郎に、少し悩みながら尋ねた。

「今夜、関西からの襲撃はあると思いますか？」

何とも簡潔だが、現状最も重要な事だ。目下、日本に於ける二大魔法関連組織「関東魔法協会」「関西呪術協会」は 表立ては和平を。しかし、水面下では幾らかいざこざがある。主に、関西の過激派が「過去の遺恨」を晴らそうと、関東に巣くう西洋魔法使いを駆逐せよ そう謳いながら襲撃を繰り返す。

故に、その質問から、従者たる土郎の答に興味を持った高音も問いを含めた視線を向ける。こちら側からの攻勢は有り得ないが、あちらに対する防衛は有り得る。その可能性の程と、理由は襲撃の有り無しを問わず、参考にするのも悪くない。油断は出来ないし、防衛自体は止めないが、自身が考え得る選択肢を増やす知識にはなる。二人の少女に視線を向けられ、静に考えを纏め、答えを口にする。

「私見だが、おそらく襲撃は無いな」

何故そこに到ったかはわからないが、高音 それとおそらく愛衣も の予想とは違っていた。

彼女達の答えに到る訳は簡単だ。単純に防衛力が劣っている隙を突く、それだけ。単純だが、それだけ動機として納得が行く。

「何故、襲撃は無いと？」

愛衣は疑問を率直に口にする。自身の解答との違いに不満は無いが、そこへ到る考え方そのものが気になるのだらう。

自分達と違い、経験値の塊のような人物の意見だ、参考にして悪いことなどない。

高音も、従者とは言え、その経験や知識は讃えて然るモノだと思っっている。よって 便乗するワケではないが 再び視線を向ける。よりあからさまに。

またも二人の視線を受け、今度はむう、と唸りながらも、性分故に律儀に応える。

「今回、中等部での修学旅行が京都らしくてな。その際に親書を送ったらしい」

噂には聞いている。なんでも「子供先生」と呼ばれ、有名になりつつある人物が中等部の一学級の担任で、その子が親書を届けるらしい。

子供先生は、魔法関係者なら知る、過去の大戦の英雄の子供で、名を「ネギ・スプリングフィールド」と言う。

「勿論、親書も狙われるだろうが」

「学園長のお孫さん、ですか？」

思わず口を挟んでしまったが、それだけのVIPだ。ある意味、親書より重要だった。

だが、それでも襲撃無しの根拠には弱い。人員を割くなりあるはずだ。

「例えば、重要性を見てみれば、学園長の孫は何より高い」

コク、頷くと、頷き返される。

互いの見解に違いは無い、と。

「だが、それよりリスクが高い」

その言葉に疑問は深くなる。

暗に、「わかるか？」と言った視線を向けられ　それはある種の「課題」だと察する。時折こうして経験を積ませ、思考させようとする。それは高音にとつては有り難いことであった。

『……先ず、学園長のお孫さんは、関東の最高権力者の孫であり』

同時に、関西の長の娘だったはずだ。つまり、その立場は微妙なバランスで保たれている。

幾ら過激派が関西呪術協会の手の者だとして、関西のトップの娘を拉致したりすれば、過激派以外が黙つてはいまい。余程の大義名分を掲げて、組織の瓦解と娘を賭けて過激派の要求を簡単には飲まないだろうし　同時に関東をも敵に回す。

つまり、自ら袋小路に立ち、それでいて尚強い「切り札」を持たねば意味はない。背水の陣などと生易しい表現では済まされないのだ。

「確かに、両営の最高権力者の娘である以上　人質としての意味合いは強いですが、関東……いえ、西洋魔法使いへの意趣返しとして使う駒としてはリスクが高過ぎますね」

味方すら敵に回しての意趣返しとは……より身近に遺恨を遺しかねない暴挙だろう。

だが、それだとやはり　関西からの襲撃が無い理由にならない。

「……“リスク”は理解出来ました。

なら、それを踏まえた“何か”がある、ですね？」

自ら次のステージに向かう高音に、土郎は姿勢も視線も高音に注ぎ、口元だけに笑みを浮かべる。

「そうだ。両組織に新たな遺恨を植え付けた者が消える動機を自ら付けたことになる。人質として金銭の要求をしても大義から外れ、賛同者を得られない。

なら、“それ以外の使い道”なら？」

“それ以外の使い道”？

暫く考えるが、それ程のVIPをどう利用するか思い付かない。

愛衣も同じなのか、涙目にウンウン唸っては高音に視線を送る。曰く、「助けてお姉さま」。

「……解らんか。」

まあ、君は純粹だからな。思い付かないかもしれないが」

知っているか？ 彼女は日本最大級の魔力保持者なのだよ

一瞬、高音は思考が止まってしまう。その言わんとしていること、それに思い到った自身が、その思考を放棄したのだから。

「解らないか？」

……いや、違うか。解ったからこそ、それを認められないのか」
認める？

そんなこと

「何事にも“最悪の選択肢”は存在する。」

君達がそれをせずとも、他人はするかもしれない」

「それは」

彼等は、“生贄”としてその魔力を使う

「そう、言いたいのですか？」

人を一ツの道具として、道具は溜め込んだ蓄電器に擬えて、蓄電器はただその力を搾られより異質な存在の動力に成り果てる。

そこに人の尊厳なんてない。そんな外道、高音には赦せる道理など無い。

ギリギリ、と奥歯が擦れる程噛み締めながら、土郎を睨む。その様子に、愛衣は驚きを見せたが やがて、同じように土郎を睨むと口を開く。

「た、確かに可能性はあるかも知れませんが！ でも、そんな人が居ることを赦せるんですかッ！？」

「赦しはしない。……が、そういった可能性は認め申を得ない」

静に 何も映さない能面のように凍えた顔をしながら 否定
と肯定を口にする土郎。

その顔に、どう答えて良いのかわからない。わからないから口に
する。

「貴方は、それで良いのですか？」

そうやって、そんな外道を そんな考え自体があることを

“仕方ない”と認めてしまっんですか!？」

高音は叫ぶ。その理想、“偉大な魔法使い（マギステル・マギ）

”が心の共鳴を以て声を荒げながら。

震えは、怒りに、哀しみに。

眼の奥から滲み出る涙を自覚しながら、それでも綴じることが許
さず、理想は瞳を透し強く男を睨み据える。

何か、ワカラナイ衝動を抑えるように、両の拳を握り固め、地に
縫い付けるように両の脚に力を入れる。

それでもしないと 高音の中の“何か”が身体を支配してしま
いそうだった。

「……………」

対する土郎は無言。

尚も鋼のように揺るがない。ただ、静かに高音の視線を受け止め
る。

ただ、静かに時は流れる。

交える二つの視線は、互いの心で擦れ違う。

少女は理想を求め、謳う。

男は少女の謳を聴き、無言。

謳う少女を慕う、尚小さき少女は 男女を悲しげに見詰め続け
る。

月に群雲、花に風

見上げた月は雲に陰り、野花は風に散り逝く。
掲げた理想は静寂に陰り、願いは現に散り逝く。

月を見上げるなら雲を消せ。

花を見詰めるなら風を消せ。

その有り得ざる望みの名は

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4791z/>

魔法少女マギステルたかね！

2011年12月16日07時49分発行